

# 薬草園の花だより

第 26 号

2020 年（令和 2 年）12 月 15 日発行

## ■ 第 26 号に寄せて

つい先頃まで、本学の管理棟入口にしばらくの間、綺麗な小菊の鉢が飾ってありました。これは、「伊奈町花いっぽい応援事業」の一貫とのことで、結構長い期間楽しませていただきました。菊は花期も長く日本の風土にも良く合い、とても親しまれている植物ですが、もともとは薬用植物としてかつての唐からもたらされたものです。

小菊をはじめ、わが国では現在は園芸植物として人気のあるキク (*Chrysanthemum morifolium var. sinense*) の仲間（キク科 *Chrysanthemum* 属）のご先祖は中国大陸由来です。奈良時代を中心にはおそらく世界で最も文化の進んでいた地域のひとつであった唐から種々の事柄を学び、また、文物を持ち帰るために派遣された遣唐使たちが持ち帰った薬用植物のひとつがキクでした。やはり遣唐使たちが持ち帰った薬用植物の中には他に、



日本薬科大学管理棟前にて

ボタン、シャクヤク、アサガオなどもあり、現在はこれらの植物は改良が進み、薬用というよりも園芸植物としての扱いの方がよく知られるようになりました。

キクはもともと不老長寿の妙薬として伝わったのですが、わが国ではその花の美しさから、園芸植物として発展し、菊の栽培方法も品種改良もともに進歩しました。その中でも 1 茎から 3 つの大輪の花をバランスよく咲かせる技法や、1 茎から 1000 輪もの大輪の花を咲かせる技法などはまさに秀悦です。キクはその後、どちらかというと、古典園芸植物という見方がなされ、一部のマニアの間での愛培の対象となっていた時期が長くなり、わが国ではさらに仏花というイメージが先行するようになりました。しかし、一方では、海外にて菊の人気が高まり、ポットマムという名前で鉢植えに適した品種改良と栽培法が発達してわが国に逆輸入され、この形での人気が高まり現在に至っています。この写真にあるのはポットマムの好例といえましょう。

十六弁の菊の御紋といえば皇室の紋章を表わすように、そして菊の花といえばわが国の晩秋を思い浮かべるように、この植物はわが国を代表する日本生まれの植物のように思われがちですが、実は唐由来の植物であるというお話をしました。

なお、わが国における野菊と称される菊は属が異なり、*Aster* 属の植物です。わが国自生の *Aster* 属の植物にはヨメナやユウガギク、ノコンギク、シオンなどが知られます。一方、わが国に自生の *Chrysanthemum* 属植物としてはアブラギクや、イソギク、ハマギクなどがあります。ジョチュウギク（除虫菊／シロバナムシヨケギクとも）や、この時期に私たちが鍋物にて食するシュンギクなども *Chrysanthemum* 属の植物ですが、これらも別途海外から渡来した植物です。

コロナ禍の中、あわただしく過ごしている間についに師走となってしまいましたが、皆様にとってこの年はどんな日々でしたでしょうか。来る年が是非、良い年になるようにとの願いは今年はとくに強いと思います。マスク生活が日常化している状況下ですが、植物たちは斯様な人間界とは一線を引いていたたかに生きています。地上部が枯れた植物の根元を見るともう來たる年の芽の準備が進んでおり、私たちも見習いたいと思わせられます。

（日本薬科大学薬用植物園長／船山信次）



薬用に使われるキク

## ■ 今咲いています・見頃です

種々の草花が冬支度を始めていますが、その中で生き生きとした柑橘類の果実が見られます。薬用植物園では、今年はキンカンがあまり実らなかったものの、ウンシュウミカンやユズがたくさんの果実をつけました。また、学内では、ジャノヒグなどの常緑の薬用植物が寒さをものとせず元気に生育しています。

### 《ウンシュウミカン》

ウンシュウミカン (*Citrus unshiu*/ミカン科) とは、冬の定番、「炬燵にミカン」として私たちにお馴染みのいわゆるミカンのことですが、その皮を干したものを陳皮（ちんぴ）といい、漢方処方に用いられる要薬のひとつもあります。

陳皮には香り成分の *d*-リモネン (*d*-limonene) のようなモノテルペン系化合物の他、*N*-メチルチラミン (*N*-methyltyramine) やシネフリン (synephrine) のようなアルカロイド類も含みます。



ウンシュウミカン

### 《ジャノヒゲ》

日本薬科大学の本部棟から講義棟に至る途中に瀟洒な枯山水が見られますが、そこに植栽されているキジカクシ科のジャノヒゲ(リュウノヒゲ/*Ophiopogon japonicus*)も薬用植物です。ここに植えられているのはチャボリュウノヒゲ(玉竜/たまりゅうなどとも)という名前で知られる園芸品種ですが、こんもりと、草姿がきれいにまとまるところから庭園によく植栽されます。



ジャノヒゲ

園芸品種としては他に黒い葉が印象的なコクリュウ(黒龍)などもあります。この植物の名前の由来は「蛇(龍)の鬚(ひげ)」由来とも、「尉(じょう)/能の老翁の役)の顎鬚(あごひげ)」由来ともされます。ジャノヒゲの仲間の根には膨らんだ部分があり、これを集めて乾燥させたものが生薬の麦門冬(バクモンドウ)で漢方薬にも配合され、鎮咳などの作用が期待されています。

ジャノヒゲは、お互いによく似ているヤブラン(*Liriope*)属植物とともに、以前にはユリ科に分類されていましたが、現在はいずれもキジカクシ科に分類されることになりました。ジャノヒゲとヤブランの区別法のひとつは種子の色です。いずれにも一見果実と思える果皮を失った種子がつきますが、ジャノヒゲの種子が鮮やかな青であるのに対し、ヤブランの種子は当初は緑色ですがやがて黒色になります。

ジャノヒゲ属植物にノシランがありますが、その学名は*Ophiopogon jaburan*です。なんとこの植物は、ジャノヒゲ属(*Ophiopogon*)でありながら種名は日本語のヤブラン由来の*jaburan*であり、なんともややこしい話となっています。

## ■寒さやコロナ禍にもかかわらず元気な植物たち

向寒の折となりました。あいかわらず、新型コロナウィルス禍がおさまらず、学生さんたちの入構制限も続いているが、植物たちは寒さやコロナ禍騒ぎをよそにそれぞれがそれぞれの花を咲かせています。

### 《温室でゴクラクチョウカが咲きました》

建学碑の前にてマリーゴールドが咲き誇っていますが、この植物は霜が降りると一変して枯れてしまいますが、この様子が見られるのもあと少しでしょう。少し前の11月末にはサフランが圃場で咲きました。この花の色は他には見られ



マリーゴールド(建学碑前)



サフラン



プリンセチア



熱帯スイレン



ゴクラクチョウカ

ない独特の美しい藤紫色ですが、残念ながらわずか数日内に花びらの様子が乱れることから最盛期は短いものです。この性質が災いしてか園芸植物としての人気はなかなか上がらないようです。先が3つに割れた赤い雌しべを集めて乾燥したものが生薬の泊夫藍(さふらん)です。1花から1本しか採れないで高価な生薬のひとつです。スペインの民族料理パエリアの色付けにも使われ、その色素主成分はクロシンという化合物です。面白いことに、分類的に全く異なるアカネ科のクチナシの果実(栗きんとんの色付け等に応用)の色素主成分と同一物質です。

温室ではプリンセチアが大株となってとても美しい状態となっています。よく知られているポインセチアのピンクバージョンで、最近人気が急上昇。ただし、これはトウダイグサ科の植物であり、茎を折って出てくる液にはホルボールエステル類を含み、触ると皮膚炎を引き起こすことがあります。一方、温室内の池では熱帯スイレンが開花、屋外の池から避難させた金魚も元気に泳いでいます。そして、温室内でついにゴ克拉クチョウカ(極楽鳥花/バショウ科)が初めて咲きました。その大型で変わった花の様子は直接観察する価値大いにあります。

## ■薬用植物園からのお知らせ

### 《良い年をお迎えください》

新型コロナウィルス禍の影響で、残念ながら学生さんたちの大学構内への入構制限は続けられていますが、薬用植物園では今年もずっといつ皆さんがあらっしゃっても良いように植物の世話を続けられてきました。皆さん元気にキャンパスに戻されることをお待ちしています。また皆さんのが自由に薬用植物園を訪れることが出来る日を心待ちにしています。

良い年をお迎えください。